気付き

海南市立東海南中学校　３年　髙田　智大

「髙田君は優しい」
僕のことを皆こういうふうに言ってくれる。おばあちゃんからも「お母さんに似たんかな優しいね。」とよく言われる。

「優しい？」僕は本当に優しいのだろうかと、優しさについて考え直す出来事があった。

２年生の５月。ちょうど大型連休が明けた週末、僕は朝から図書館へ行こうと意気込んで準備をしていた。

「夕方雨が降るから、遅くなるなら、カッパを持っていったほうがいいよ。」
母がカッパを玄関に置いてくれていた。僕はそれを持たずに出発した。母の言葉にすこしわずらわしさまで感じていた。やはり、大雨が降った。僕はずぶぬれで帰り、お風呂へ直行した。この日まで僕は何度もこのやり取りをしていた。学校へ行くときも、ずぶぬれで帰ってきて先にお風呂へ入り、ぬれた制服はその場で母がすぐに洗ってくれ、翌日にはきれいな制服で登校できている。そんなことが時々あった。

いつもどおりお風呂から出てきて、絶望した。リュック、教科書、ノートすべてが雨としかも水筒がひっくり返っていたのか、お茶でぐちゃぐちゃになってしまっていた。

「まずは頭を乾かしたら？」母はいつもどおりだった。「もう無理だ。」僕はその繰り返しだった。母は「諦めたら終わり。まずは教科書をタオルで拭こう。」と言った。妹たちも「一緒に協力する。」と言ってくれた。母はドライヤーで乾かし、妹たちは２階の扇風機で乾かした。僕は慌てるばかりだった。「教科書、もうボロボロだ。」僕はもう諦めていた。

「何かこぼしたり、切れたりしたページってすごく頭に残るんだよ。だから次のテストはいい点かもね。」
母は冷静で輝いて見えた。この時点で晩ご飯の時間はとっくに過ぎていた。

父が帰宅し、先にお風呂に入った後も、まだ晩ご飯は用意できそうにない状況だった。母は「家族で一つになろう。５人ですれば早いよ。」と父に言った。母はひたすらドライヤーで乾かし、妹は扇風機で、父は「教科書はアイロンする。」とアイロンを一枚一枚かけてくれていた。家族は一つになっていた。

終わったのは妹たちがいつも寝る時間だった。誰一人文句を言わず、「よかったね。」とさえ言ってくれた。いつもニコニコしていて優しい母が、このときもニコニコしながら皆に指示を出していた。僕はこの日まで、母は優しいので弱いと思っていた。違う、強い。母は強いから優しいんだ。

僕が今まで思っていた「優しさ」は表面的だった。僕が「当たり前」だと思ってやっている行動が「優しい」と言われるのは、母が「優しさ」を積み重ねて育ててくれたからだ。「髙田君は優しい。」この言葉の優しさの中に、僕の優しさの中にも、強さはあるのだろうか。

この日から、考えが少し変わった。強い優しい人になりたいと心から思った。

僕のクラスには、よく気がつく優しい友達がいる。その友達は皆の手助けを当たり前のようにしているところをよく見る。でも、その友達は自分のやるべきことを放り出したりはしていない。自分のこともきちんとし、皆のことも手伝っている。強さがないと、優しくできないと実感する。僕の優しさの中にも、強さが隠れているといいな。

今日は昼から雨が降ってくるらしい。僕の自転車のカゴには、母が準備してくれたカッパが入っている。

でも、次は僕が、カッパを準備する側にまわっていき
たい。